《資料の周辺》

# 長明詠（正治二年第二度百首）欠歌の出現を期待して

山崎桂子

近年の中世和歌研究の対象として、百首和歌は主要な位置を占めている。私も新古今時代の百首和歌の一つである「正明二年初度百首和歌」と「同第二度百首和歌」を中心に、前後の歌壇の動きを追ってみたいと思っている者であるが、基礎的な伝本研究の段階で、残されている問題少なしとしないのが現状である。

例えば、第二度百首の場合、今日までに写本六、版本二の計八伝本が知られるが[1]、これらの伝本には共通して欠歌となっている部分が二ケ所ある。その二ケ所は、今のところ、家集等でも補うことが出来ないのである。ところが、多人数百首として編纂（集成）される以前の個人別百首が独自に伝存していて、思いがけず編纂本では不明の箇所を補いうるということがあるので[2]、百首歌資料の出現には常に気をくばっていなくてはならない。

折しも、最近の古書目録に「題詠百首和歌集」なる一本を見出し、興味深かったので、メモ程度の報告をしておきたいと思う。解説によると、巻末に「元禄四年十月中旬写之畢」とある由。内容は、百首和歌九種をあつめたもので、詳細が次のように記されている。

①千五百番歌合　後鳥羽院「仙洞百首歌合」ともいう
②正治二年第二度百首　後鳥羽院「正治後度百首」ともいう
③順徳院御百首　（前中納言定家御判）
④建保名所百首　後鳥羽院
⑤詠百首応製和歌　散位従五位下鴨縣主長明
⑥文永五年百首　山辺隠侶
⑦詠百首和歌　頓阿
⑧詠百首和歌　後小松院
⑨澤庵百首

目録解説では、⑤～⑨の出典は未勘となっているが、ちょうど掲載されている一丁分の写真が、④末尾と⑤巻首にあたっているので検してみると、⑤は、その端作から推測される如く、正治二年第二度百首の折の鴨長明詠であることがわかる。②と同一の催しの詠である。また、④は後鳥羽院詠とされているが、周知の如く後鳥羽院はこの催しに参加しておらず、目録の思い違いで、実のところは順徳院詠であることが写真によってわかる。次の⑥以下は写真がないの

で明言は出来ないが、⑥は藤原為家の文永五年百首であろう。私家集大成所収「大納言為家集」下の末に収められている百首三篇のうちの一つ、「月日徒然百首、文永五、自去〻日五箇日之間詠之」「詠百首和歌山辺隠侶」がそれである。

従って、この本は、最も成立の早い②⑤の百首（正治二年1,200）から、⑨（澤庵宗彭　天正元1,573～正保二1,645）まで、七人の百首九種をあつめたもので、特別の収集意図は感じられない。外題が「題詠百首和歌集」となっているが、厳密に言えば、①と③は、四季・恋・雑という部立のみで、一題ごとの歌題はない百首である。手もとにある百首類をとりあつめたという印象の歌集である。

ところで、冒頭で述べた、第二度百首の欠歌二ケ所のうちの一つが、実は鴨長明詠の部分なのである。すなわち、長明詠の秋の部月題で、五首あるべきところ四首しかなく、第五首目が一首分空白になっている。すると、この目録に載せる歌集の長明詠が月題五首を完備しているとすると、編纂本よりも古い形態を伝えた一本となる可能性を秘めているわけで、まことに興味深い。写真掲載部分は、巻頭霞題五首までで如何ともし難いが、霞題部分を第二度百首の八伝本と比べてみたが大きな異同はない。印象としては岡山大学附属図書蔵本に近いような気がするが決め手はない。

尚、④の内裏名所百首順徳院詠も94番から100番までの七首が写真によって知られる。就中、100番目御津浜題の歌が、

たれしかも思ひ出らんおほとものみつの浜松浪のうへとも

となっているのは、赤瀬知子氏の指摘のとおり、内裏名所百首の抄出本のうちの一部伝本に見られる特徴である。この歌は作者未詳歌で、本来は、

みつの浜岩こす波の忘貝わすれすみゆる松かねの夢

が入っているべきところである。すると、この順徳院百首は、抄出本のうちの無注本のどれかからの書写ではないかと推測される。広大の国語国文研究室にも、抄出本の古写本が蔵されており興味は尽きないが、今は以上にとどめる。

古書目録の解説と写真だけから窺えるところは、ほんのわずかでしかないが、帯に新出の資料に対する目くばりと期待を持ちつづけていたいと思っている。

（注1）拙稿「正治二年第二度百首和歌伝本考」（『研究と資料』第四輯）

（注2）正治初度百首の編纂本では共通して欠歌となっている小侍従の一首が彼女の独自伝存の百首によって補えるという例がある。拙稿「正治初度百首研究のために――『小侍従集別本』の解題と翻刻――」（『研究と資料』第二輯）

（注3）『内裏名所百首注　疎竹文庫蔵』（京都大学国語国文資料叢書35）